

## 特論3. 橋本漆原山遺跡出土の五輪塔について

### はじめに

橋本漆原山遺跡では、丘陵先端部に墓地と思われる場所を検出した。この丘陵先端部周辺では火葬人骨や五輪塔が数多く出土している。近年、五輪塔などの中・近世の石造物に関する研究に関心が集まっており、山陰地方でも、米待石製の石造物の研究などが行われている（石造物研究会編 2001）。本稿では、こうした先学を参考に、数多く出土した五輪塔を分析し、本遺跡で出土した五輪塔の年代や形態の変化の意味等に触れていきたい。

### 1. 分析方法について

鳥取県西部の五輪塔については、既に中森 祥氏が資料の紹介・分析を行っている（中森 2001・2002）。中森氏は、伯耆地域出土の五輪塔の内、空風輪と火輪の大きさを各遺跡ごとに比較し、それぞれが時期が下るにつれて縮小していく過程を明らかにした。本遺跡出土五輪塔の石材も全て角閃石を含む安山岩であり、近隣で使用されている石材と同様であるので、本稿でもこれに習い、空風輪と火輪の大きさを比較する。

また、本稿の分析では、あわせて空風輪の断面形も考慮に入れる。これは、本遺跡内で出土した空風輪の内、半分近くの断面が扁平であるという特徴を持つためである。この断面扁平のものが大型のものに多いのか、それとも小型のものに多いのか、それとも時期差にかかわらず普遍的に存在するのかという事を確認するためである。

もう1点本稿では、地輪の大きさも比較してみたい。これは、本遺跡で出土した地輪の中に、途中まで火輪として製作されていたと思われる資料（S35）があったこと関係する。この資料には上面・下面いずれにも側縁部に、研磨によってつくられたと思われる平滑面が認められる。この平滑面は火輪にも認められ（S57）、火輪の底面の反りを形作るためのものと考えられる。また、（S35）では火輪に必要なほぞ穴を開ける部分が稜線で囲まれており、製作途中だったものを地輪に転化した事を示している。これらから、少なくとも火輪と地輪については、石切場から採取する整形以前の石の大きさはほぼ同じで、定型化した形で工人にもたらされていたことが想定できるのである。この想定を検証するために本稿では、地輪の大きさと火輪の大きさも比較する<sup>(9)</sup>。

### 2. 分析結果

#### (1) 空風輪について

図120は、中森氏の分析結果と本遺跡の空風輪の断面形別の大きさを比較したものである。まず、全体的に本遺跡の資料の大きさの分布は広く、一時期の様相を示しているものとは考えられない。しかし、極端に大きな日下古墳群出土資料の分布には入ってこないで、それ以後の資料と言えるであろう。日下古墳群以後の資料については漸移的な変化と言えるので、本遺跡出土資料の年代は明確にはできないが、大体、15世紀以降の資料と考えられる。

また、空風輪の断面形についてであるが、扁平なものも丸形のものもいずれも大きさに幅がある。図120では高さ25cm以上の大型品、高さ18cm以上の中型品、それ以下の小型品の3グループぐらいに分けられそうだが、断面扁平なものは小型品の中には存在しない。また、大型のものも1点のみであり、基本的に中型品の範疇で考えられる。この小型品は中森氏の分析では、範囲外になってくるが、これが16世紀以降の資料であるかどうかは分からない。断面が扁平なものは、一般に「作業の省略化」として捉えられ、型式学的には後出する要素と想定できる。しかし、先述した中森氏の分析から考えれば、日下古墳群の資料以降では普遍的に存在するものであり、工人差などの系譜の違いを示している可能性もある<sup>(10)</sup>。

# 中森分析

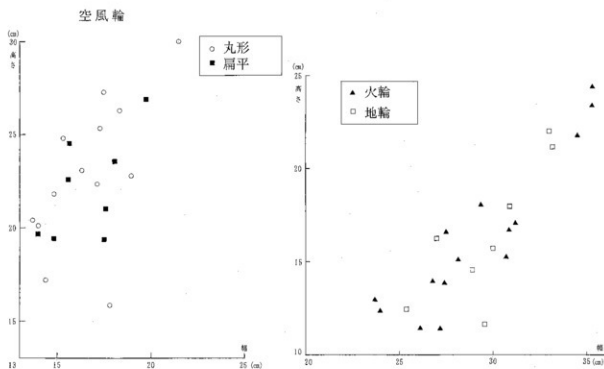
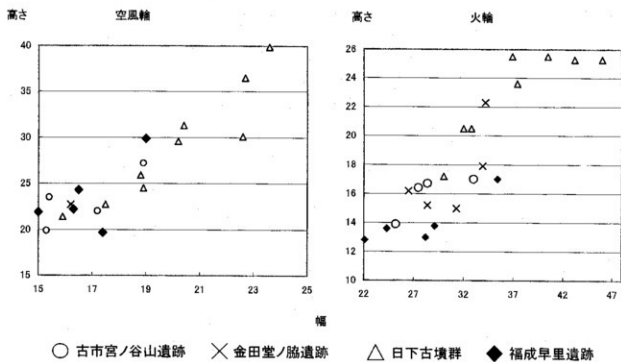


図120 五輪塔法量比較

## (2) 火輪と地輪について

同じく図120は、中森氏の分析結果と本遺跡の火輪と地輪の大きさを比較したものである。火輪に関しては先述した空風輪と同様に、一時期の様相を示していないようである。また、大部分は空風輪と同じく日下古墳群以降の資料と思われる分布範囲を示すが、日下古墳群出土資料の分布に一部入っていることは空風輪と異なる。火輪も高さ20cm以上の大型品、高さ14cm以上の中型品、それ未満の小型品の3つのグループに分けられそうである。

火輪は、近世になると軒の上下線の反りが上線のみになり、下線は平行になることが指摘されている(関野2001)が、本遺跡で出土した資料はほぼ全て反っており、近世以降のものは無いと考えられる。そのように考えると、本遺跡から出土した火輪の多くは、15~16世紀代のものと考えられる。

地輪との関係に関しては、地輪も大きく3つのグループに分けられ、先述した火輪の状況と対応する。これは五輪塔がそれぞれ重なってつくられることから、そのバランスを考えれば当然のことと言えば当然である。しかし、特に小型品の地輪と火輪に関しては、その高さがほぼ一致しており、いずれも板石状になっている。この小型の地輪と火輪の違いは、軒の反りとほぞ穴の有無と言ってもよいくらい類似している(写真6)。古い大型の火輪は高さが高く、地輪との差異は明確である。この変化は、おそらく先述したように整形以前の素材の大きさがある程度そろえて、さらに整形も簡略させたシステマチックな生産体制への変化と対応するのではないかと思われる。

## 3. まとめ

以上のことから、本遺跡の五輪塔については、①時期幅はあるが、大部分は15~16世紀代につくられたものと考えられる。②断面が扁平な空風輪は中型品の範疇に存在しており、時期的に下った段階で出現し、再び姿を消す。③地輪と火輪については特に小型のものの中で類似しているものがあり、素材獲得から整形までの省力化を指向している可能性がある。といった点が指摘できた。特に空風輪の断面扁平化と火輪と地輪の製作作業工程の簡略化に関しては、中森氏が指摘した五輪塔が小型化する背景と思われる。つまり、日下古墳群出土例のような



写真6 小型の地輪と火輪

大型の五輪塔では、各輪をそれぞれ個別につくりだしていたのだが、需要の増加と共に大量生産が可能な生産体制へ変化したために小型化、省略化したと筆者は想定している。その変換時期は、中森氏の分析から考えると15世紀以降と考えられるが、想定の上に想定を重ねている部分が多いので、より細かな型式学的検討や文献資料からの分析などを加えて改めて検討する必要がある。しかし、この時期あたりから五輪塔の数が増加していることは明らかであり、それはこうした風習が流行した結果に過ぎないのか。それとも、こうした墓をつくることのできる階層が広がったことを示しているのであろうか。重要な問題である。

とかく軽視されがちな五輪塔であるが、こうした分析を通じて編年のみではなく、生産体制の変化からその需要の増減等を考えることができるのなら、中・近世における死生観や宗教観といった分野にまで踏み込んだ議論ができるものと考えられる。

(下江健太)

(註1) 空風輪は実測したもの内、長さが欠損していないものをグラフ化した。火輪と地輪に関しては、実測していない火輪3点、地輪3点をそれぞれ加えてグラフ化している。なお、高さ、幅と共に最大値をとっている。

(註2) 日下古墳群では断面について言及されていないので、全て丸形の断面かどうかは不明であるが、写真や米子市教育委員会 下高瑞哉氏の御教示から判断すると基本的に断面扁平ではないようである。

#### (引用参考文献)

石造物研究会編2001『来待石を中心とした日本海文化』石造物研究会 来待ストーン客員研究員会

中森 祥2001「出土した五輪塔、宝篋印塔—鳥取県西部を中心に—」『来待石を中心とした日本海文化』石造物研究会 来待ストーン客員研究員会

2002「第8章第3節 出土した五輪塔について」『古市遺跡群3』鳥取県教育文化財団調査報告書78  
財団法人 鳥取県教育文化財団

間野大丞2001「来待石製五輪塔・宝篋印塔について—中世末から近世初頭を中心に—」『来待石を中心とした日本海文化』石造物研究会 来待ストーン客員研究員会

#### (図出典)

図120 (中森2002)より転載。